

三沢南崎遺跡4

小都市文化財調査報告書

第243集

2009

小都市教育委員会

三沢南崎遺跡4

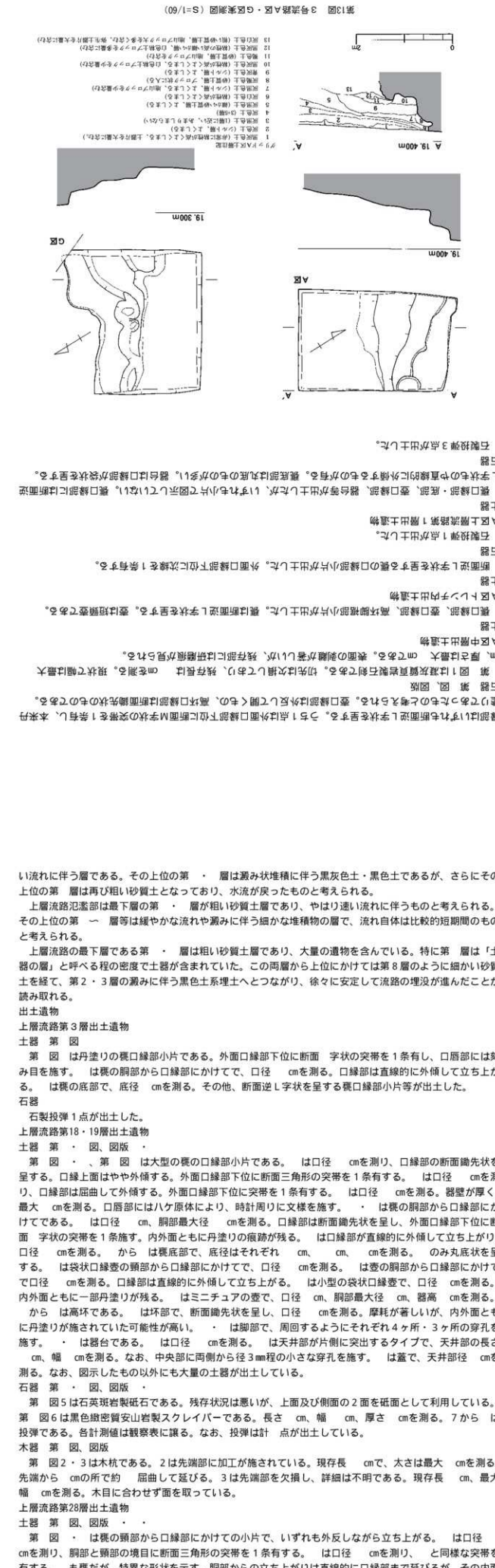
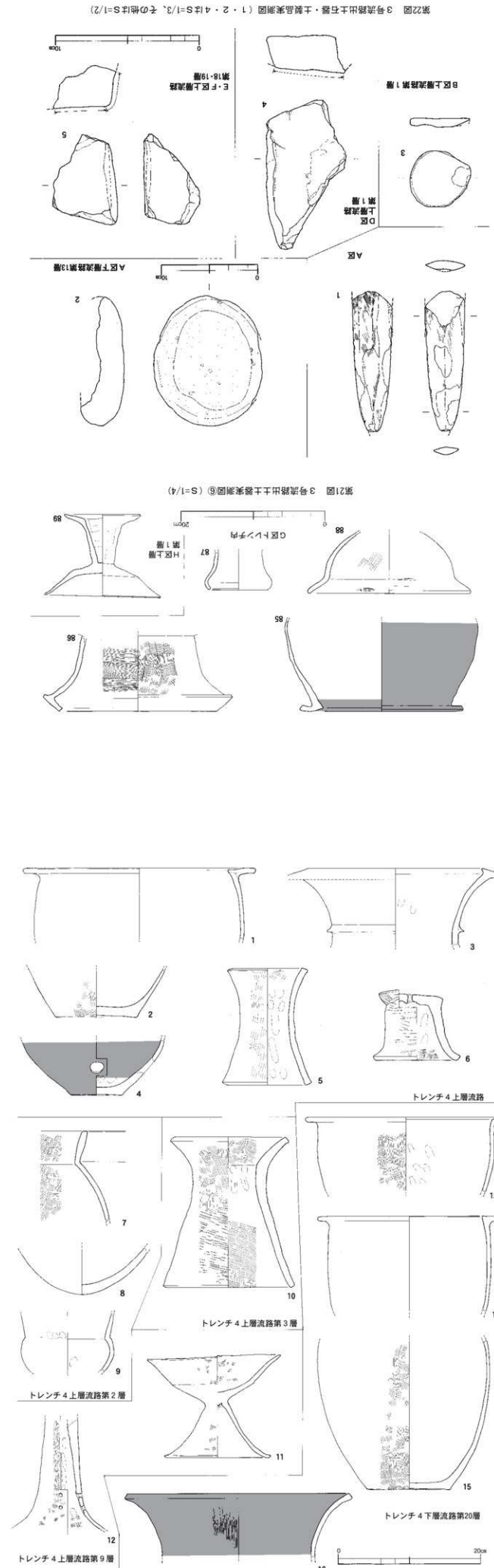
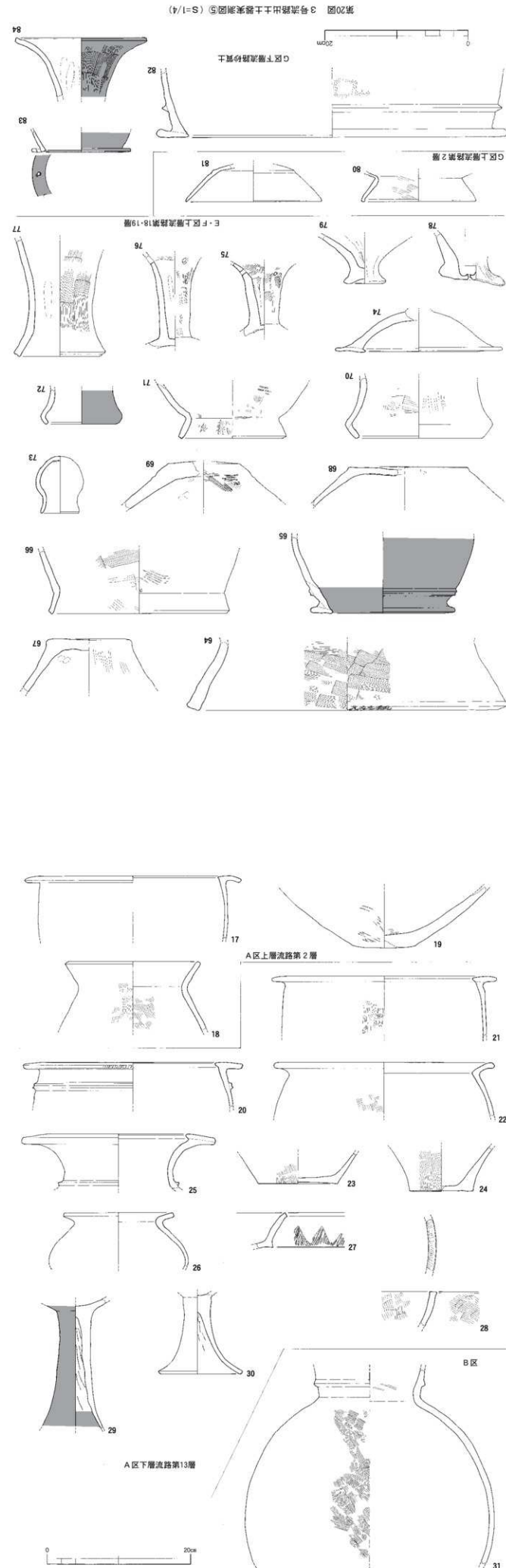
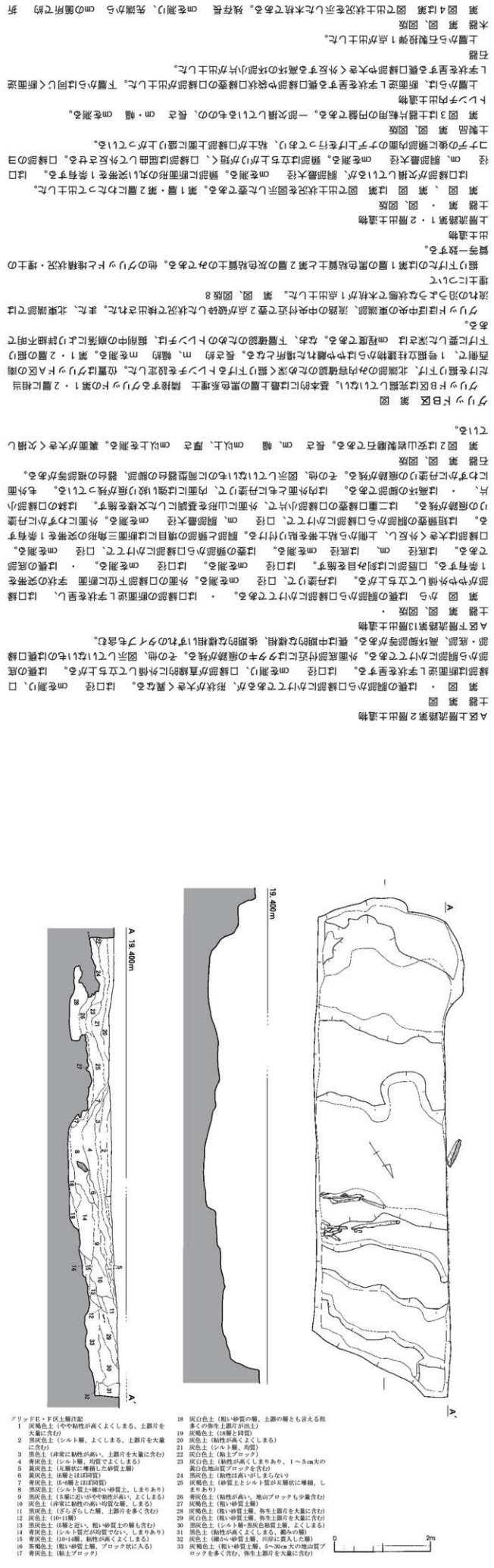
- 福岡県小都市三沢所在遺跡の調査報告 -

小都市文化財調査報告書第 集

2009

小都市教育委員会





第15図 3号流路E・F区実測図 (S=1/60)

第17図 3号流路出土土器実測図② (S=1/4)

第16図 3号流路出土土器実測図① (S=1/4)

第18図 3号流路A区・G区実測図 (S=1/60)

い流れに伴う層である。その上位の第 層は礫み状堆積に伴う黒灰色土・黒色土であるが、さらにその上位の第 層は再び粗い砂質土となっており、水流が戻ったものと考えられる。上層流路泥濘部は最下層の第 層が粗い砂質土層であり、やはり速い流れに伴うものと考えられる。その上位の第 層等は緩やかな流れや礫みに伴う細かな堆積物の層で、流れ自体は比較的短期間のものであると考えられる。

上層流路の最下層である第 層は粗い砂質土層であり、大量の遺物を含んでいる。特に第 層は「土器の層」と呼べる程度の密度で土器が含まれていた。この両層から上位にかけては第8層のように細かな砂質土を経て、第2・3層の礫みに伴う黒色土系埋土へとつながり、徐々に安定して流路の埋没が進んだことが読み取れる。

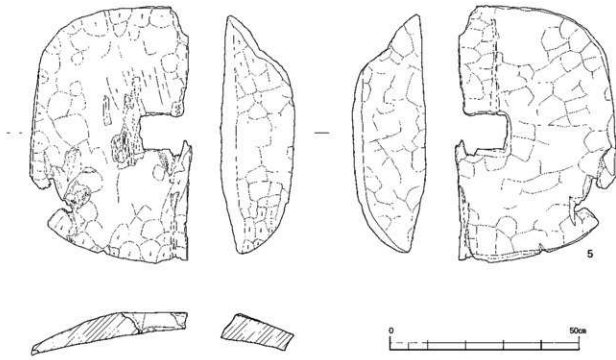
出土遺物
 上層流路第3層出土遺物
 土器 第 図
 第 図 は丹塗りの横口縁部小片である。外面口縁部下に断面 字状の突帯を1条有し、口縁部には斜め目を施す。 横の胴部から口縁部にかけて、口径 cmを測る。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。 横の底部で、底径 cmを測る。その他、断面逆し字状を呈する横口縁部小片等が出土した。

石器
 石製投擲1点が出土した。
 上層流路第18・19層出土遺物
 土器 第 図、図版
 第 図、第 図 は大型の横の口縁部小片である。口径 cmを測り、口縁部の断面輪先状を呈する。口縁上面はやや外傾する。外面口縁部下に断面三角形の突帯を1条有する。口径 cmを測り、口縁部は屈曲して外傾する。外面口縁部下に突帯を1条有する。口径 cmを測る。器壁が厚く、最大 cmを測る。口縁部にはハケ原形により、時計周りに文様を施す。 横の胴部から口縁部にかけてである。口径 cm、胴部最大径 cmを測る。口縁部は断面輪先状を呈し、外面口縁部下に断面 字状の突帯を1条施す。内外面ともに丹塗りの痕跡が残る。 口縁部が直線的に外傾して立ち上がり、口径 cmを測る。 横の底部で、底径はそれぞれ cm、cmを測る。のみ丸底状を呈する。 横の口縁部から口縁部にかけて、口径 cmを測る。 横の胴部から口縁部にかけて口径 cmを測る。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。は小型の袋状口縁部で、口径 cmを測る。内外面ともに丹塗りが残る。はミニチュアの壺で、口径 cm、胴部最大径 cm、器高 cmを測る。 横の胴部から口縁部にかけては、高坏である。は高坏で、断面輪先状を呈し、口径 cmを測る。摩耗が著しいが、内外面ともに丹塗りが施されていた可能性が高い。 横の胴部、周囲するようにそれぞれ4ヶ所・3ヶ所の穿孔を施す。 横の台である。口径 cmを測る。は天井部が片側に突出するタイプで、天井部の長さ cm、幅 cmを測る。なお、中央部に両側から径3mm程度の小さな穿孔を施す。は蓋で、天井部径 cmを測る。なお、図示したもの以外にも大量の土器が出土している。

石器 第 図、図版
 第 図5は石英斑岩製砥石である。残存状況は悪いが、上面及び側面の2面を砥面として利用している。第 図6は黒色緻密質安山岩製スレイバーである。長さ cm、幅 cm、厚さ cmを測る。7からは投擲である。各計測値は観察表に譲る。なお、投擲は計 点が出土している。

木器 第 図、図版
 第 図2・3は木杭である。2は先端部に加工が施されている。現存長 cmで、太さは最大 cmを測る。先端から cmの所で約 屈曲して延びる。3は先端部を欠損し、詳細は不明である。現存長 cm、最大幅 cmを測る。木目に合わせず面を取っている。

上層流路第28層出土遺物
 土器 第 図、図版
 第 図 横の胴部から口縁部にかけての小片で、いずれも外反しながら立ち上がる。口径 cmを測り、胴部と胴部の目目に断面三角形の突帯を1条有する。口径 cmを測り、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。は横の胴部から口縁部にかけての小片で、いずれも外反しながら立ち上がる。口径 cmを測り、胴部と胴部の目目に断面三角形の突帯を1条有する。口径 cmを測り、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。は横の胴部から口縁部にかけての小片で、いずれも外反しながら立ち上がる。口径 cmを測り、胴部と胴部の目目に断面三角形の突帯を1条有する。口径 cmを測り、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。



第25図 3号流路出土器実測図② (S=1/8)

1 基本層序 5層、6層
イネは5層と6層で検出されたが、いずれも低い密度である。ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザザ節型、ミヤコザサ節型の各分類群も5層と6層で検出された。ネザザ節型が6層でやや高い密度である以外はいずれも低い密度である。

2 3号流路E・F区 8層、層
イネは8層と 層で検出された。層では 個 gと比較の高い密度である。キビ族型は 層で検出されたが低い密度である。ヨシ属は8層と 層で検出されたが低い密度である。ススキ属型は8層で検出されたがやや低い密度である。メダケ節型とネザザ節型は8層と 層で検出されたが、いずれも低い密度である。ミヤコザサ節型は 層で検出されたが低い密度である。

5. 考察
基本層序の5層と6層、3号流路E・F区の8層と 層の各層でイネが検出されている。稲作跡の可能性を判断する際の目安は、試料 gあたりイネ機動細胞プラント・オパールが 個の密度で検出された場合とされている。藤原ほか、。ただしその後の各地の調査において、 個 g前後の密度でも水田遺構が検出された事例が多数報告されていることから、 個 g程度であっても稲作の可能性を考える必要がある。

3号流路E・F区の 層では、プラント・オパール密度が 個 gと比較の高い値である。また、8層でも 個 gの密度で検出されている。ただし、いずれも流路内の堆積物であることから、ここが耕作地であった可能性は考えにくい。周辺で耕作行われており、水流作用等によりそこからイネのプラント・オパールが流入した。耕作土壌が運ばれて流路内に堆積した、何らかの理由で稲葉が投棄されたなどが考えられる。基本層序の5層と6層ではプラント・オパール密度が 個 g前後と低いことから、当該層で耕作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。耕作地は周辺であったと思われる。仮に調査地で耕作が行われていたとするならば、プラント・オパール密度が低いことに関しては以下のような要因が考えられる。1 耕作期間 耕作が行われた年数が短かった、2 土壌の堆積速度が速かった、3 イネの生産性が悪かった、4 土壌の容脱作用等でプラント・オパールが風化をうけ、未成熟のものが分解された、5 洪水などによって耕作土が流出した、6 採取地点が畦畔など耕作面以外であった、などである。その他の分類群はいずれも低い密度であり、植生を考察することは困難である。

6. まとめ
三沢南崎遺跡4においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性と周辺植生について検討を行った。その結果、基本層序の5層と6層および3号流路E・F区の8層と 層については、耕作が行われていた可能性を積極的に支持することはできなかった。ただし、いずれにおいてもイネのプラント・オパールが検出されていることから、それぞれ調査地周辺で耕作が行われていた可能性が示唆された。なお、イネ以外の分類群の検出量が少なく、周辺植生までは考察できなかった。

文 献

杉山真二 タケ亜科植物の機動細胞珪酸体 富士竹類植物園報告 第 号 p
杉山真二 植物珪酸体 プラント・オパール 考古学と植物学 同成社 p
杉山真二・松田隆二・藤原宏志 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕追求のための基礎資料として - 考古学と自然科学 p
藤原宏志 プラント・オパール分析法の基礎的研究 - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 - 考古学と自然科学 p
藤原宏志・杉山真二 プラント・オパール分析法の基礎的研究 - プラント・オパール分析による水田址の探査 - 考古学と自然科学 p

出土層序	層番号	層名	土質	色調	土質	検出・検出数	植物・動物
3号流路E・F区	19-18	13	III-14.7	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	20	14	III-14.8	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	21	15	III-14.9	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	22	16	III-14.10	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	23	17	III-14.11	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	24	18	III-14.12	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	25	19	III-14.13	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	26	20	III-14.14	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	27	21	III-14.15	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	28	22	III-14.16	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	29	23	III-14.17	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	30	24	III-14.18	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房

図 版

出土層序	層番号	層名	土質	色調	土質	検出・検出数	植物・動物
3号流路E・F区	21-16	13	III-14.7	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	22	14	III-14.8	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	23	15	III-14.9	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	24	16	III-14.10	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	25	17	III-14.11	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	26	18	III-14.12	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	27	19	III-14.13	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	28	20	III-14.14	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房

出土層序	層番号	層名	土質	色調	土質	検出・検出数	植物・動物
3号流路E・F区	21-16	13	III-14.7	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	22	14	III-14.8	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	23	15	III-14.9	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房
	24	16	III-14.10	灰・黄褐色	III-2000層序層に相当	炭酸カルシウム・リン酸カルシウム	内節・二葉期果房

表1 三沢南崎遺跡4のプラント・オパール分析結果

分類群 (和名・学名)	基本層序				
	5層	6層	8層	14層	
イネ科	Gramineae (Grasses)				
イネ	Oryza sativa	12	6	18	30
キビ族型	Panicaceae type				6
ヨシ属	Phragmites	6	6	12	6
ススキ属型	Miscanthus type	12	24	24	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	6	18	12	12
ネザザ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	12	48	12	30
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	6	6	6
その他	Others	6	6	6	12
未分類等	Unknown	120	216	146	161
(海綿骨針)	Sponge	12	12	12	12
プラント・オパール総数	Total	180	329	229	263

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の乾比重を1.0と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	0.35	0.18	0.53	0.88
ヨシ属	Phragmites	0.38 <td>0.38 <td>0.76 <td>0.38</td> </td></td>	0.38 <td>0.76 <td>0.38</td> </td>	0.76 <td>0.38</td>	0.38
ススキ属型	Miscanthus type	0.15 <td>0.30</td> <td>0.30</td> <td>0.30</td>	0.30	0.30	0.30
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.07	0.21	0.14	0.14
ネザザ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.06	0.23	0.06	0.14
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.02		0.02

第6章 調査の成果

1. 各流路の時期について

今回の調査では3条の流路が検出されたが、調査期間の都合上全て完掘にはならず、トレンチ及びグリッド調査を実施した。表1に各調査区で出土した主な遺物出土層位・内容・時期をまとめている。「流路」という性格上、表の内容で明確に時期決定できるものではないが、内容把握の一助としてその変遷の「可能性」を示したい。

●各流路の前後関係
今回1・2・3号と銘打った「流路」だが、決して別々の3条の流れが同時併存していた訳ではない。現在も存する口無川につながる考えられる。「川」の流れの履歴に過ぎないことを最初に明示しておきたい。1・2・3号流路はそれぞれ切り合い関係にあり、その後関係ははっきりしている。その上層・下層の別を含め、古い順に以下に記す。

1号流路下層流路 → 1号流路上層流路 → 2号流路 → 3号流路下層流路 → 3号流路上層流路

●各流路の時期
上記の前後関係は表1に示した出土土器の様相とも合致している。これらを合わせて考えると、各流路の時期は以下のようなことになる。

1号流路=弥生時代前期中～後半
2号流路=弥生時代前期後半～中期中頃
3号流路=弥生時代中期中頃～古墳時代前期
この内1・2号流路は出土遺物が極少量で詳細な分析は難しいが、3号流路からは大量の遺物が出し、その流れの変遷を追うことができる。

●3号流路の時期
3号流路出土土器のうち、最も古いものは弥生時代中期前半の表口縁部小片であるが、全遺物の多さと比較してその量は極僅かで、正確な流路の始まりを表しているとは言い難い。そして、次に古い時期の土器は弥生時代中期中頃から後半にかけてのもので、この流路から出土した土器の中でも最も多い。中でも下層流路の最下層 グリッドE・F区下層流路第 層 からその上層 グリッドE下層流路第 層 にかけては、他の時期の土器をほとんど含まないことに加えて大量出土の状況が見られ、当時流路への生活廃棄物の大量廃棄が始まったものと考えられる。

一方、上層流路に関しては、2つの時期の遺物が多い。まず1つ目は弥生時代中期後半である。これは本来下層流路に廃棄されていた土器群と考えられ、洪水等の影響で上層流路が形成された際に流れ込んだものである。これに関しては、下層流路の上位のみを切る上層流路から、中期中頃の土器がほとんど出土していることも判断材料となる。次に、上層流路に最も多く含まれているのは、弥生時代後期中頃から後半の土器である。特に最下層 グリッドE・F区上層流路第 層 では、中期の土器を割合で圧倒する。遺物の中には後期前半のものも存在し、比較的長期間にわたって流路として機能していたものと考えられる。なお、最上層の第1・2層からは古墳時代前期の土器が多く出土している。

2. 1号掘立柱建物と流路の関係について

1号掘立柱建物は、丘陵斜面から流路が存在する低地へ至る地形変換点付近に位置している。主軸を3号流路に揃えていることから、何らかの関連性を持ったものである可能性を考慮して調査を実施していたが、その前面の流路中から祭祀土器が一括して出土した。

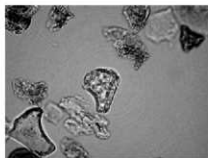
●出土層位について
祭祀土器が一括出土したのは、グリッドC区上層流路第1・2層中からである。前述のようにこの層は上層流路終末期の溝み状の段階のものと考えられ、出土土器のほとんどは弥生時代後期中頃から古墳時代前期にかけてのものである。流路中から遺物が一括出土するという状況も含め、この出土状況はイレギュラーであると問わざるを得ない。この問題解決の糸口は、その出土位置である。祭祀土器群は3号流路の岸辺付近から出土している。このことから考えると、この土器群は弥生時代中期後半の下層流路に伴って廃棄されたもの

*: 黒点

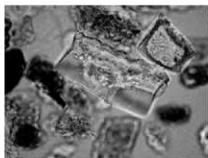
ブランド・オパールズの顕微鏡写真



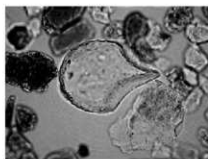
イネ



イネ



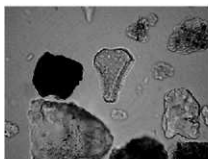
キビ族型



ヨシ属



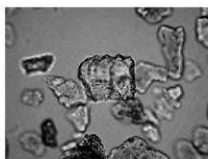
ヨシ属



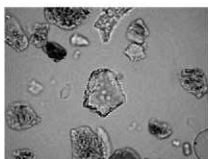
ススキ属型



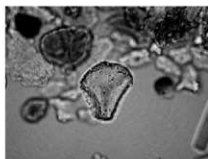
ネザサ節型



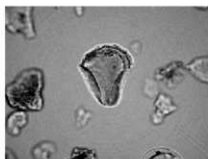
ネザサ節型



ミヤロザサ節型



メダケ節型



メダケ節型



海綿骨針

50 μm

2. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉等の植物遺体は水成堆積物では保存状況が良好だが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、基本層序から採取された第5層 試料 3：流路検出面直上の層＝流路が埋没してすぐの堆積層、第6層 試料 4：流路検出面の層＝流路はこの層から切り込んでいる の2点、3号流路E・F区から採取された第8層 試料 5：弥生土器を大量に含む層 直下の砂層 の直上の層、鼠返し 小 出土層、第 層 試料 6：弥生土器を大量に含む層 直下の砂層 の直上の層 の2点の計4点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、プラント・オパール分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村 隆夫 の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1 試料から 1 cm を採量
- 2 %リン酸三ナトリウム 水 溶液を加え 1分間湯煎
- 3 水洗処理の後、0.5 mm の篩で嫌などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4 %フッ化水素酸溶液を加えて 1分間湯煎
- 5 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1分間湯煎 を施す
- 6 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 100 倍で行った。花粉の同定は、鳥倉 隆夫 および中村 隆夫 をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン - で結んで示す。イネ属については、中村 隆夫 を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

1 分類群

出現した分類群は、樹木花粉、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉、シダ植物孢子2形態の計 6 である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が 100 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉

モミ属、ツガ属、マツ属、椎綱維管束亜属、スギ、イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属 - アサダ、クリ、シイ属 - マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属 - ケヤキ、エノキ属 - ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、ムクロジ属、マタタビ属、モクセイ科、ツツジ科、イスノキ属

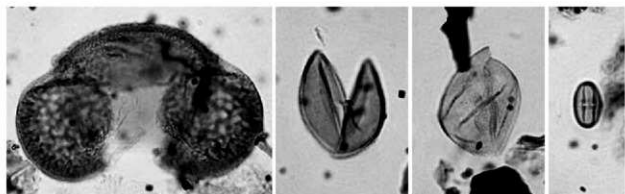
樹木花粉と草本花粉を含むもの

クワ科 - イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属 - ガマズミ属

草本花粉

ガマ属 - ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタテ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、キンボウグ属、アブラナ科、ノボドウ、キカ

三沢南崎遺跡4の花粉・胞子

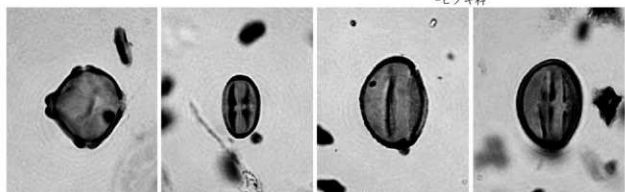


1 マツ属複雑管束亜属

2 スギ

3 イチイ科-イヌガヤ科
-ヒノキ科

4 クリ

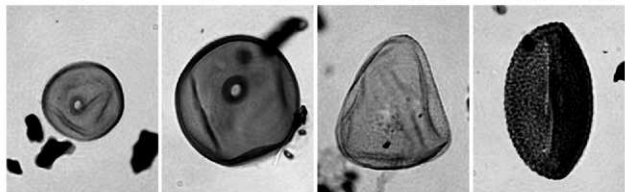


5 ハンノキ属

6 シイ属-マテバシイ属

7 コナラ属コナラ亜属

8 コナラ属アカガシ亜属

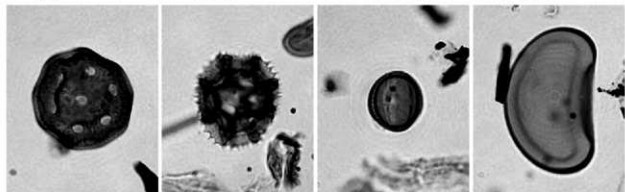


9 イネ科

10 イネ属型

11 カヤツリグサ科

12 ソバ属



13 ナデシコ科

14 タンポポ亜科

15 ヨモギ属

16 シダ植物単糸溝胞子

— 10 μm



①調査区西半全景（真上から）



②調査区西半全景（西側上空から）

図版 2



①調査区西半全景（北西側上空から）



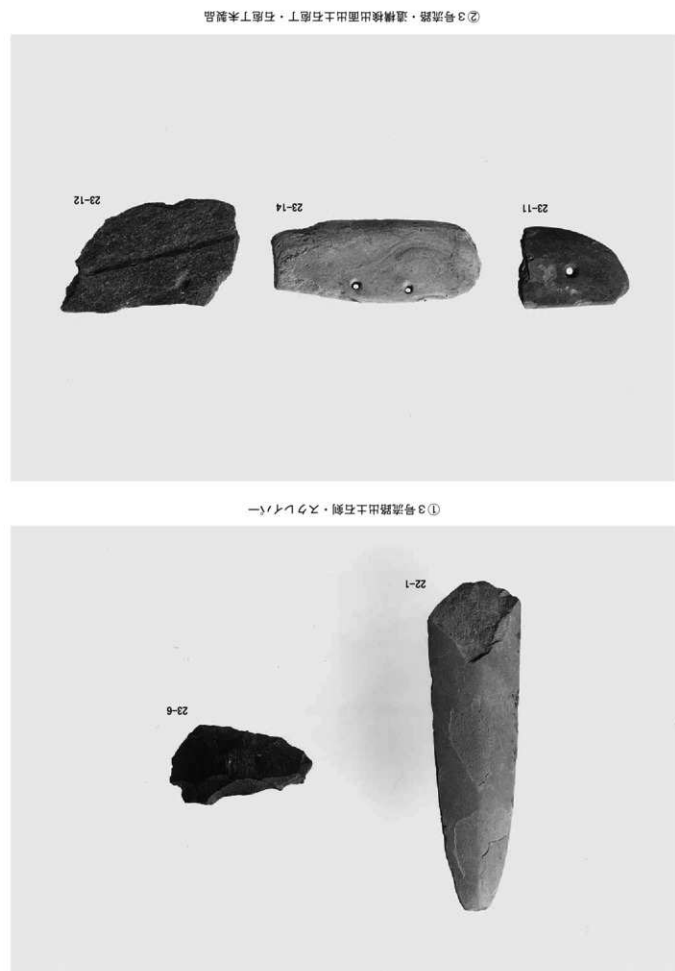
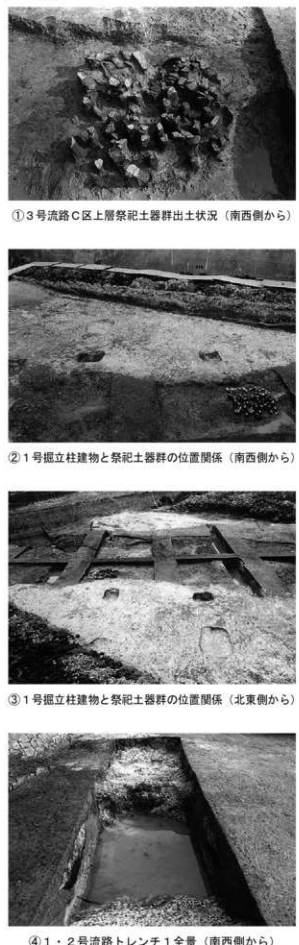
②調査区西半全景（東側上空から）



図版 7



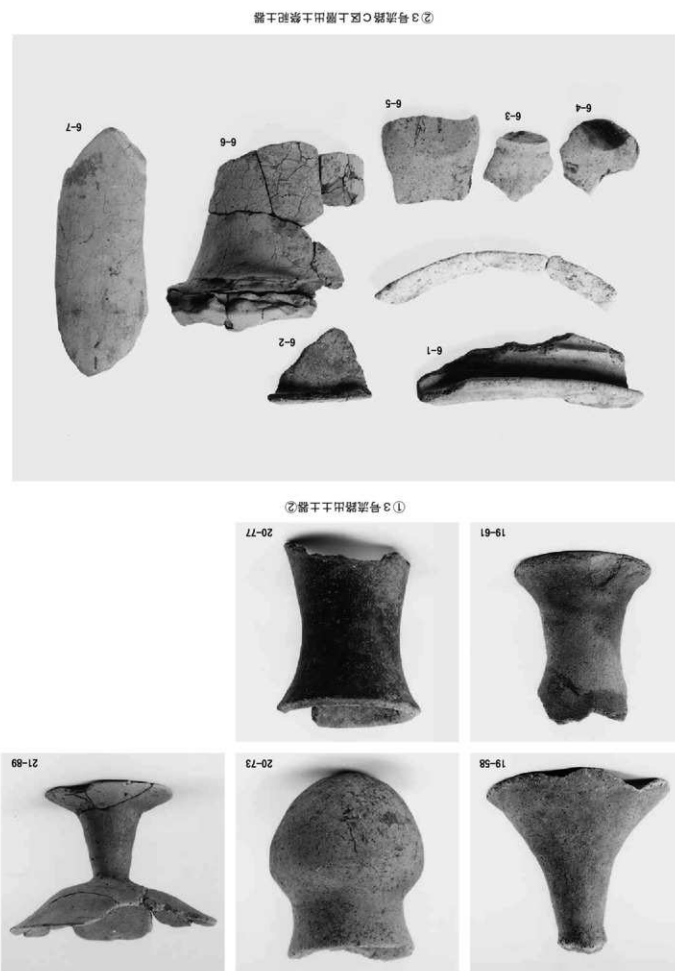
図版 6



図版 14



図版 15

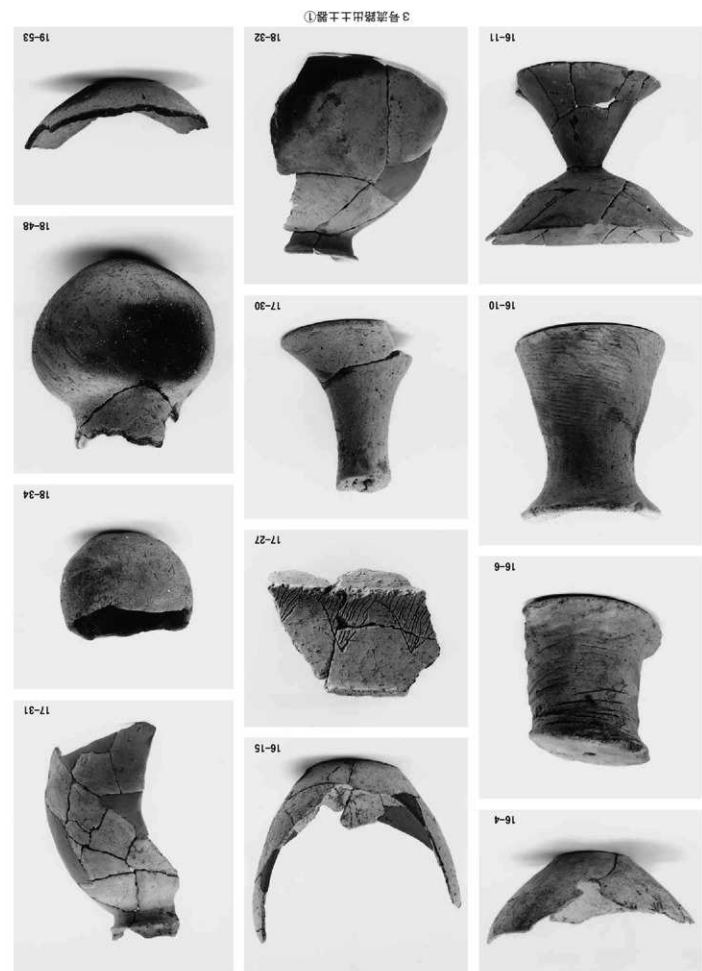


図版 11

報告書抄録

ふりがな	みつさわみなみざいせき 4						
書名	三沢南崎遺跡 4						
副書名							
巻次							
シリーズ名	小都市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 2 4 3 集						
編著者名	杉本岳史						
編集機関	小都市教育委員会						
所在地	〒 福岡県小都市小郡 1						
発行年月日	年 3 月 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三沢南崎 遺跡 4	福岡県 小都市 三沢				~	m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
三沢南崎 遺跡 4	集落	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物 1 棟 流路 3 条		弥生土器 土師器 石器 木器		
要 約	流路 3 条とそれに隣接する掘立柱建物 1 棟が検出された。流路は弥生時代前期中頃から後半の 1 号流路、同前期中頃から中期中頃の 2 号流路、同中期中頃から古墳時代前期の 3 号流路である。これらのうち 1 号流路・3 号流路には上層・下層の 2 度の流れが確認された。掘立柱建物は 3 号流路と主軸を一致させている。建物前面の流路内からは中期後半の祭祀土器がまとまって出土し、水辺の祭祀が行われた可能性が指摘される。						

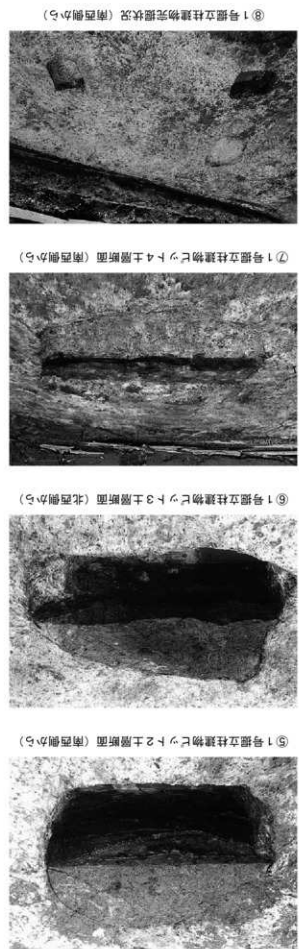
三沢南崎遺跡 4
小都市文化財調査報告書
第 2 4 3 集
年 3 月 日
発行 小都市教育委員会
福岡県小都市小郡
印刷 ハイウェーブデザイン
福岡県小都市力武



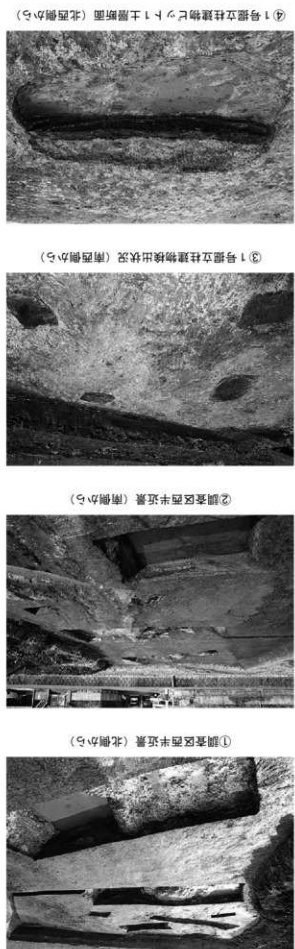
図版 10



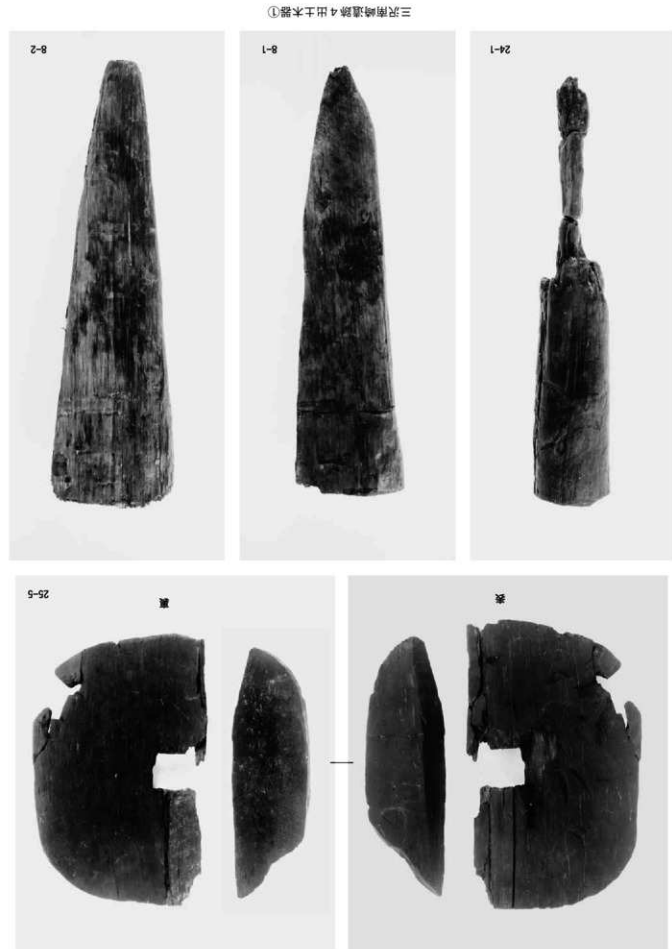
図版 3



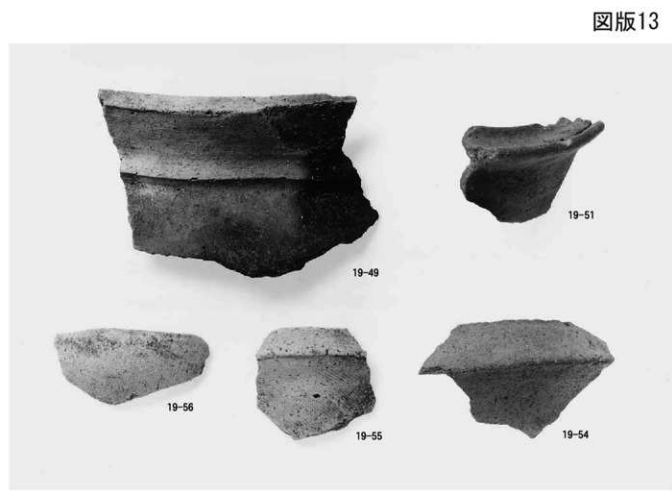
図版 5



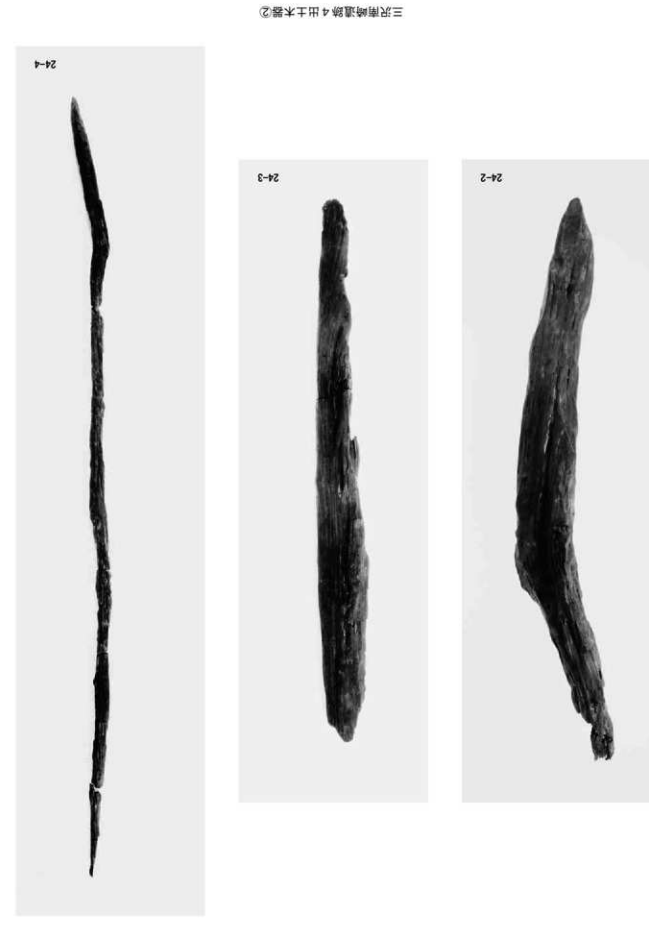
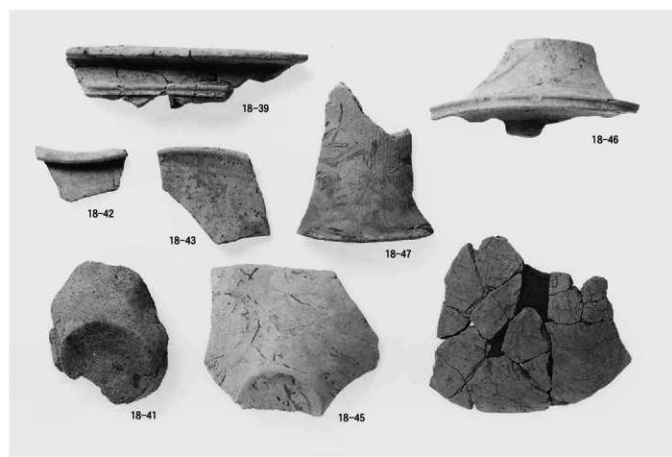
図版 8



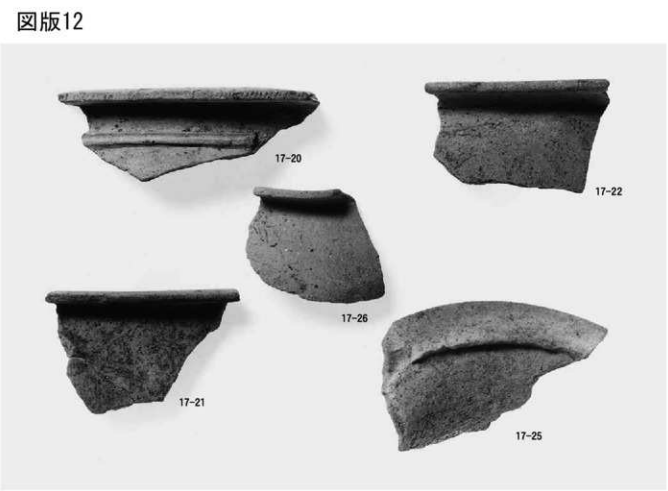
図版 16



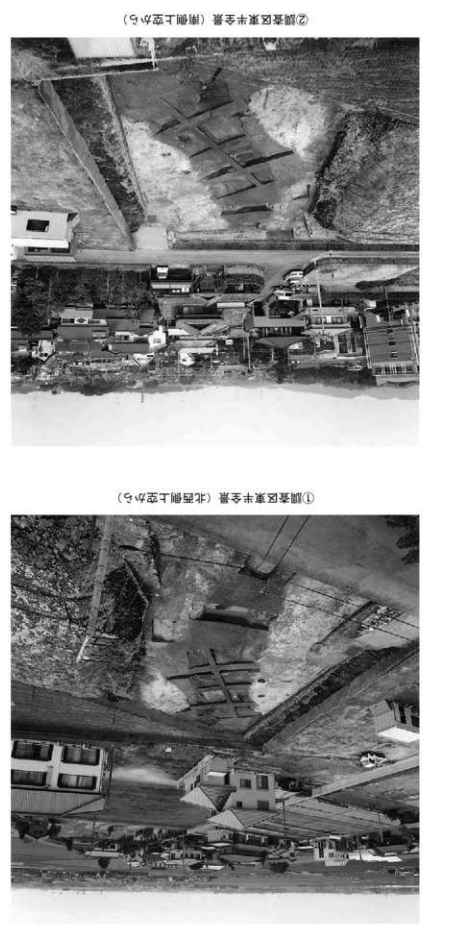
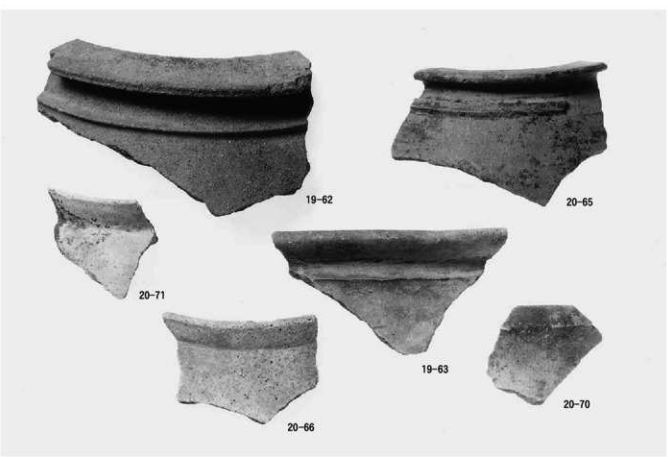
図版 13



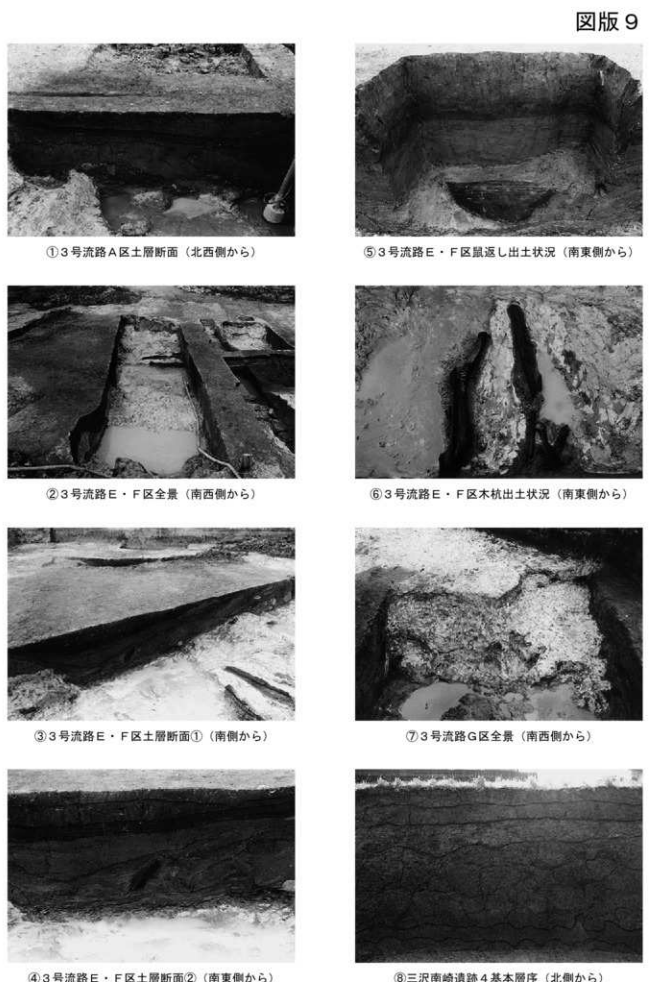
図版 17



図版 12



図版 4



図版 9